

# ふるさと見て歩き

## 第57回

### 結城寅寿の墓

#### ◆結城寅寿とは

長倉地区の蒼泉寺には水戸藩の家老を務めた結城寅寿の墓があります。結城寅寿（朝道）は文政元年（一八一八）、水戸藩の家老結城家の次男として江戸に生まれました。同七年（一八二四）兄の死により七才にして家督を継ぎ千石の結城家を相続しました。幼い頃から英俊のほ

答しますが、そもそもこのような咎めを受けることになったのは、結城寅寿とその一派が幕府に讒言したためと認識していました。

#### ◆結城派と斉昭の対立

幕府との対立を深める斉昭や藤田東湖ら改革派は、それに対抗する藩内の保守派を排除する姿勢を強めていきます。中でも結城は重臣でもあり、保守派の筆頭と目され、斉昭から強い怨みを買っていました。斉昭は懇意にしていた幕府老中阿部正弘へ送った書状の中で、自分と対立する家臣十五名についてその処罰を請うていますが、結城寅寿については、「奸物の首領」として自分を退けて権力を振るうつもりである、と記しています。

その後弘化元年十一月、斉昭は謹慎を解かれました。その結果、改革派の勢力が増大し、保守派の面々は藩内抗争に敗れる形で処罰されることになりました。処罰の理由は「藩主の暗殺を企てた」などという根拠の乏しいもので、尋問も取り調べもない一方的な処分でした。

#### ◆長倉村に収監

斉昭から「奸物の首領」と目された結城寅寿とその子一万丸、結城派の興津良恭や医師の十河祐元らも捕らえられました。当時、長倉は松平氏の領地で陣屋がありました。獄舎はその一角にあったようです。結城

親子は安政三年（一八五六）四月、長倉の刑場で死罪となり、結城派の他の面々も他藩にまで及ぶ厳しい探索により処罰されました。

この前年の十月には江戸を中心とした関東地方で大地震が起き（安政江戸地震）、死者四千余人、倒壊家屋一万余戸という被害をもたらしました。この地震で水戸の両田といわれた家老戸田忠敏と側用人藤田東湖が犠牲となりました。斉昭は二人の重臣を失い、藩内の対立はますます激しさを増します。一説には、腹心東湖の死により、斉昭の行動を家臣が押さえることが難しくなり、保守派への粛清が一気に進んだ、といわれています。



▲長倉陣屋のあと

#### ◆墓の建立

結城寅寿の遺骸は、藩命により「打ち捨て」とされたようです。処刑場に隣接する蒼泉寺の住職、米庵天貞が

これを憐れみ、ひそかに寺内に葬りました。その後、氏家（栃木県さくら市）に在住していた結城の縁者により墓石が建てられました。

結城寅寿と同時代の水戸藩の学者青山延寿の孫にあたる山川菊栄は、結城の処刑の状況を知る人物が初めて人に語った回想として、処刑は前触れなく侍が三、四人やってきて、獄舎の役人に口止め料として五両が与えられたこと、運びこまれた棺桶は武士の用いる寝棺ではなく粗末な座棺だったこと、殺害される際、結城は最後まで公正な審理を求め訴え続けたことを記しています。



▲結城寅寿の墓

#### ※参考文献

山川菊栄『覚書幕末の水戸藩』岩波文庫・『水戸市史中巻（四）』

歴史民俗資料館大宮館

52-11450